

2026 年度 新課程での 2 回目の共通テストを終えて

「高校数学・新課程を考える会」事務局長／予備校講師 大淵智勝
学びエイド 鉄人講師 塚本有馬

1. はじめに

2026 年 1 月に実施された大学入学共通テスト（以下、共通テスト）は通算 6 回目、新課程下としては 2 回目の実施であった。昨年度にはあった旧課程移行措置がなくなったこともあり、数学 IA では、過去に出題されたような数学 I と数学 A を合わせた「図形問題」の大問が出題されるかと思われたが、そこまでの大きな変更はなかった。

今回は、2026 年度の共通テストの出題について見ていきたい。

2. 2026 年度共通テスト 得点の傾向

【数学 IA】

受験者数については、2025 年度の新旧課程の合計 344,618 人に比べると 1,600 人程度の減少であった。

ここ 6 回のうち「センター試験時代を含めて過去最低平均点」だった 2022 年度を除いた 2021～2025 年度の 4 回は、平均点が 5 割台に収まっていたが、2026 年度は平均点が 5 割を切る結果となった。

年度	受験者数（人）	平均点（点）
2021（第 1 日程）	356,493	57.68
2022	357,357	37.96
2023	346,628	55.65
2024	339,152	51.38
2025	308,344 （旧課程 :36,274）	53.51
2026	343,000	47.20

細かい得点分布を見ていくと、中央値が前年の 56 点から 48 点へと 8 点下がり、第 1 四分位数も 40 点から 34 点へ低下した。注目すべきは上位層の沈み込みで、上位 1 割の得点が前年の 84 点か

ら 75 点へと 9 点も下がった。難化が下位層だけでなく上位層にまで一様に及んだ年であった。

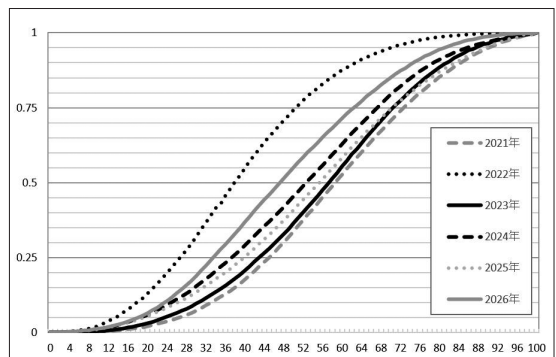


図1 数学 IA・2021～2026 年度の累積相対度数

新課程になり、共通テストの数学 IA はすべて必答問題となった。2026 年度の問題の分けと分野、配点は以下になっている。

第 1 問 (30 点)

[1] 集合と命題 (10 点)

[2] 図形と計量 (三角比) (20 点)

第 2 問 (30 点)

[1] 2 次関数 (15 点)

[2] データの分析 (15 点)

第 3 問 図形の性質 (20 点)

第 4 問 場合の数と確率 (20 点)

大きい分野の割り振りは 2025 年度とあまり変わらなかったが、第 1 問 [1] が「数と式」をとともわず、「集合と命題」が単独で出題された点は特徴的であった。

【数学 IIBC】

数学 IIBC について、受験者数は 2025 年度の新旧課程の合計 317,745 人と比べるとほぼ同じ人数であった。

共通テストになってからの 6 回において、数学

IIB・IIBCの平均点は、「センター試験時代を含めて下から3番目」に低い平均点となった2022年のものを含めて、低い順に2022年→2025年→2026年→2024年→2021年→2023年という並びになる。

年度	受験者数(人)	平均点(点)
2021(第1日程)	319,697	59.93
2022	321,691	43.06
2023	316,728	61.48
2024	312,255	57.74
2025	285,563 (旧課程: 32,182)	51.56
2026	317,586	54.52

細かい得点分布を見ると、第1四分位数が34点から40点へ、中央値が52点から56点へと、下位・中位の層が押し上げられた。ただし第3四分位数は72点で前年と横ばい、上位1割は87点から86点へむしろ微減しており、易化の恩恵は中下位層に集中し、上位層はほとんど動いていないという、層によって温度差のある易化であった。

なお、例年、累積相対度数を記事に載せているが、これは、平均点の変動だけでは共通テストの年ごとの難易度を語りきれないためである。例えば、国公立大学を受験することを考えた場合、毎年共通テストを受験して国公立大学へ入学する受験生は約13万人であり、2026年度の数学IIBCの受験者は上表のように約31万人であるから、年ごとの共通テストの難易度については中央値よりも上側の部分を参考にすることとなる。

例えば、国公立大学を目指す受験生が、「共通テストの過去五回の問題を得点を取りやすい順に解く」というのであれば、第3四分位数あたりの高い順を考え、2021年→2023年→2024年→2025年→2022年の順に解けば良いということになる。

また、国公立大学でも難関といわれる大学については、第3四分位数よりも上、最難関といわれる大学については、上位1割の得点分布を参考にすることとなる。

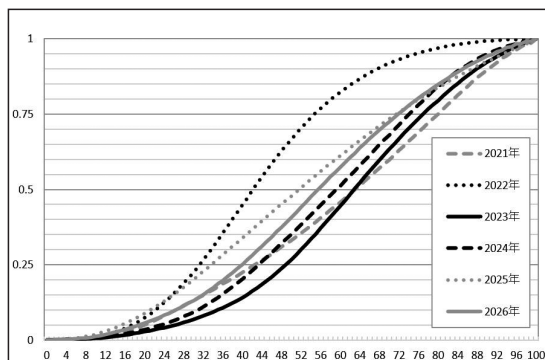


図2 数学IIB→IIBC・2021～2026年度の累積相対度数

新課程になり、数学IIBから数学IIBCとなった。また、選択大問が3から4に増えた。2026年度の問題の区分けと分野、配点は以下になっている。

(必答問題)

第1問 図形と方程式(15点)

第2問 三角関数(15点)

第3問 微分法と積分法(22点)

(選択問題: 4大問中3大問選択)

第4問 数列(16点)

第5問 統計的な推測(16点)

第6問 ベクトル(16点)

第7問 複素数平面と式と曲線(16点)

2025年度は第1問が「三角関数(15点)」、第2問が「指数関数・対数関数(15点)」であったので、センター試験時代にもたまに見られた「いろいろな関数」の片方を「図形と方程式」に変えるという出題となった。

3. 設問別正答率などによる分析

ところで例年、「設問別得点率」と「ノーマーク率」の表を載せているが、これについては今年度は今流行りのAIに分析をしてもらうことにした。使用したAIはClaude(モデル: Opus4.8, エフォート: 高)である。なお、元々は私の手元にある自己採点・再現答案を元にした設問別得点率を用いていたが、この原稿の締切の前日に大学入試センターが公式の設問別得点率を出してきたので、急遽、それもClaudeに入れて分析をかけてもらった。さらには「問題作成部会

の見解」も同日公開されたので、これについての記述も Claude に入れた。ちなみに公式の平均点や設問別得点率は、大学入試に共通テストを利用しない受験生の値も加味されるため、自己採点結果を基にしたものよりも低くなる傾向があり、現にそのとおりになっていた。

以下が、Claude による分析である。

(1) 大問別の得点率 —— どこで失点したか

公式の大問別得点率は次のとおりである。

表 1 大問別の得点率 (大学入試センター公表・全受験者)

数学 IA	得点率
第 1 問 (集合と命題／図形と計量)	54.2%
第 2 問 (2 次関数／データの分析)	57.0%
第 3 問 (図形の性質・空間)	32.4%
第 4 問 (場合の数と確率)	36.9%

数学 IIBC	得点率
第 1 問 (図形と方程式)	56.2%
第 2 問 (三角関数)	50.3%
第 3 問 (微分・積分)	62.5%
第 4 問 (数列)	50.6%
第 5 問 (統計的な推測)	44.8%
第 6 問 (ベクトル)	56.1%
第 7 問 (複素数平面と式と曲線)	57.0%

数学 IA では、空間図形を扱った第 3 問 (32.4%) と、リーグ戦の確率を扱った第 4 問 (36.9%) が際立って低い。数学 IIBC では、統計的な推測の第 5 問 (44.8%) が 7 題中の最低で、逆に微分・積分の第 3 問 (62.5%) が最高であった。

(2) 時間切れか、実力差か

例年同様、正答率の低い設問とその性質を見ることが、失点の原因が「時間切れ」か「実力差」かを切り分けたい。今年はとりわけ、複数のマークがすべて正しくないと得点にならない完答形式の終盤設問で、正答率が極端に低くなった。数学 IA 第 1 問末尾の図形と計量 (内接円・傍接円から辺の長さを求める部分、配点 4 の完答) は公式正答率 2.7%、数学 IA 第 4 問末尾 (リーグ戦の

確率を 3 人と 4 人で比較する 6 マークの完答、配点 2) はわずか 3.1% である。終盤に到達できたとしても、連鎖のどこか一つを落とせば 0 点になる構造が、難化に拍車をかけた。

問題作成部会自身も、本年の数学 IA について、1 問ごとの難易度はおおむね適切だったものの、状況設定が抽象的・複雑で、条件を読み解くのに受験者が時間を要したと総括している。また、同様の数学的処理を繰り返す設問が多く、思考時間の確保の観点から全体の分量削減が課題だとも述べている。これは、序盤の図形と計量で時間を消耗し後半に届かない、という得点率の傾向と符合する。

一方で、失点が「実力差」による設問も明確であった。自己採点データの成績層別正解率を見ると、その質がよくわかる。

表 2 数学 IA 各大問の最難設問における成績層別正解率 (自己採点データ)

大問 (最難設問)	最上位層 (75 点以上)	最下位層 (45 点未満)
第 1 問 (図形と計量の末尾)	64.4%	4.9%
第 2 問 (2 次関数の逆算)	91.2%	14.5%
第 3 問 (空間の体積比)	96.3%	0.9%
第 4 問 (リーグ戦の確率)	81.7%	4.3%

第 2 問・第 3 問の最難設問は、最上位層が 9 割以上正答している。とりわけ第 3 問の空間図形 (体積比) は最上位層 96.3% に対し最下位層 0.9% と学力できれいに二分されており、難度の高さが学力をよく選別した良問であった。これらは時間ではなく実力で差がついた設問といえる。問題作成部会も、空間図形では着目すべき平面 ($\triangle ABD$) を受験者自身が定める形式に序盤から難しさがあつたとし、その線分比を求める設問の正答率が 58.3% と序盤にしては低かったことを指摘している。

これに対し、第 1 問末尾の図形と計量は、最上位層でも正解率が 64.4% にとどまった (公式の完答正答率は 2.7%)。試験冒頭でこれだけ失点と

無回答が生じるのは異例であり、難度と時間消費の両面で序盤の関門になったことを示している。第4問末尾は、到達できた最上位層は81.7%が正答しているにもかかわらず公式正答率3.1%であり、上位層は解けるのに大多数が到達できなかった、典型的な時間切れである。すなわち数学IAの難化は、序盤の図形と計量での時間消耗という配分上の問題と、第2問・第3問の抽象度・空間化による実力差の問題とが複合したものと整理できる。

数学ⅡBCで最も得点率が低かった第5問(統計的な推測, 44.8%)も示唆的である。受験者の多くが手をつけていながら得点率は数学ⅡBC最低で、標本平均の分散を問う設問の正答率は32.0%にとどまった。統計は「取り組みやすいが得点しにくい」分野であり、概念理解の質が問われたといえる。一方、得点率が最高だった第3問(微分・積分, 62.5%)も、前半の極値やグラフの概形を問う設問はいずれも正答率が85%を超える一方、後半の面積条件やグラフの場合分け(条件を付加した3次関数の概形)の正答率は50%を下回っており、易しい前半と骨のある後半の落差が大きかった。

(3) 数学ⅡBCの「読み取り」の壁

数学ⅡBCの難所は、計算量よりも図や論理の読み取りに集中した。第1問では、二つの円の共有点を通る直線の式変形の論理的意味を問う設問が43.8%、絶対値付き不等式の表す領域を図から選ぶ設問が一桁台～30%台にとどまった。第6問のベクトルでは点Pの存在範囲を図で選ぶ設問が33.9%、第7問でも w や w^2 が描く図形を選ぶ設問が37.4%・34.7%であった。いずれも、立式や計算ではなく、結果を図形として解釈し直す段階でつまづいている。

(以上、Claudeによる分析)

4. 個別の問題について

ここでは、具体的な問題を見ていく。

【数学IA】

まず、数学IAについては、単独で出題された「集合と命題」である。

第1問

〔1〕全体集合 U を2以上20以下の自然数全体の集合とする。すなわち

$$U = \{2, 3, 4, \dots, 20\}$$

である。

2以上9以下の自然数 a, b に対して、 U の部分集合 A, B を

$$A = \{k | k \in U, k \text{ と } a \text{ は } 1 \text{ 以外の正の公約数をもつ}\}$$

$$B = \{k | k \in U, k \text{ と } b \text{ は } 1 \text{ 以外の正の公約数をもつ}\}$$

とする。

例えば

$$a = 7 \text{ のとき, } A = \{7, 14\}$$

$$a = 9 \text{ のとき, } A = \{3, 6, 9, 12, 15, 18\}$$

である。

(1) $a = 3$ のとき, $A = \boxed{\text{ア}}$, $b = 4$ のとき, $B = \boxed{\text{イ}}$ である。このとき

$$A \cap B = \boxed{\text{ウ}}, A \cap \bar{B} = \boxed{\text{エ}}$$

である。

$\boxed{\text{ア}} \sim \boxed{\text{エ}}$ の解答群(同じものを繰り返し選んでもよい。)

- ① {12} ② {3, 9} ③ {3, 9, 15} ④ {6, 12, 18}
 ⑤ {3, 6, 9, 15, 18} ⑥ {4, 8, 12, 16, 20}
 ⑦ {3, 6, 9, 12, 15, 18} ⑧ {2, 4, 8, 10, 14, 16, 20}
 ⑨ {2, 4, 6, 8, 10, 12, 14, 16, 18, 20}
 ⑩ {2, 3, 4, 6, 8, 9, 10, 12, 14, 15, 16, 18, 20}

(2) a, b が2以上9以下の自然数であることに注意して, a, b について考えよう。

(i) $\bar{A}$ の要素に, 2の倍数も3の倍数もないとき

$$a = \boxed{\text{オ}}$$

である。

(ii) $A \cap \bar{B} = \{5\}$ であるとき

$$a = \boxed{\text{カ}} \quad b = \boxed{\text{キ}}$$

である。

(2026年度 大学入学共通テスト 数学IA)

2以上20以下の自然数を全体集合とし、「自然数 a と1以外の公約数をもつ要素の集合」とし

て部分集合 A などを定める、という設定の問題である。

具体例から集合の定義を読み取らせ、後半では「補集合 $\bar{A}$ に 2 の倍数も 3 の倍数も含まれないとき a を求めよ」「 $A \cap \bar{B} = \{5\}$ のときの a, b を求めよ」と、条件から a, b を逆算させている。入口にあたる設問 ($a = 3$ のときの A) の正答率は公式値で 94.5% と高い一方、 a, b を逆算させる設問は 43.1% まで下がった。定義を読み解く前半と、それを逆向きに使う後半とで、はっきりと差がつく構成である。新課程が重視する「数学的な対象を定義に立ち返って考える力」を、平易な題材で問うた象徴的な一題といえる。

もう一つは、第 2 問 [1] の二次関数の問題である。(問題そのものについては会話文を含めて長いため掲載は省略します。)

(1) で「2 次関数と定義域が与えられたとき、最大値・最小値を求める」という方向を確認したうえで、(2) 以降は方向が反転する。「ある区間での最大値・最小値に関する条件」だけが与えられ、その条件を満たす 2 次関数を復元させるのである。さらに (3) では、「区間を $b-1 \leq x \leq b+1$ と動かしたとき、最大値が 0 以上になるのは $1 \leq b \leq 7$ のときである」といった条件群から、グラフと x 軸の共有点を特定させる。

問題作成部会が「普段の学びとは異なる視点が要請される」と位置づけたのがこの (3) で、直前の (2)(ii) の正答率が 53.9% であったのに対し、(3) では 13.9% まで落ち込み、両者の差は 40 ポイントに及んだ。時間切れではなく、思考の方向転換そのものでつまづいた、実力差の出た設問である。「求める」から「決める・特定する」へと要求を反転させる手法は、本年の数学 IA・IIBC を通じた共通の設計思想であり、難化の核心の一つでもある。

【数学 IIBC】

数学 IIBC については、まず、第 5 問「統計的な推測」が挙げられる。

ある資格試験の合格率が 0.4 より高いといえる

かを、有意水準 5% で仮説検定する問題である。400 人中 184 人合格 (比率 0.46) のとき帰無仮説が棄却され「合格率は 0.4 より高いと判断できる」と結論する。(3) では、同じ比率 0.46 でも、標本サイズが 100 人 (46 人合格) になると、今度は帰無仮説が棄却されない——すなわち「高いとは判断できない」に結論が反転する。標本比率が同じでも標本サイズによって検定の結論が変わることを、受験者自身に計算させて体感させる、極めて教育的な設計である。もっとも、第 5 問の得点率は数学 IIBC の 7 題中で最も低い 44.8% であり、標本平均の分散を問う設問の正答率は 32.0% にとどまった。無回答は少なく多くの受験者が手をつけたものの、概念の理解そのものが問われ、得点には結びつきにくかった。問題作成部会も、授業では標本サイズを変えた標本平均の分布のシミュレーションを通じて検定結果との関係を批判的に検討する活動を提案しており、本問の教育的価値は高い。

もう一つは、第 7 問である。

$w = z + \frac{1}{z}$ とおき、様々な条件が与えられた z に対しての w の軌跡などを求める問題である。数学 C の「複素数平面」と「式と曲線 (2 次曲線)」を一つの設問の中で結びつける、新課程ならではの融合問題である。前半の計算 ($z = \sqrt{3} + i$ のときの w の値など) は 7~9 割が正答する取り組みやすさだが、 w や w^2 の描く図形を選ぶ設問では正答率が 37.4%・34.7% まで下がる。複素数の演算を、最終的に 2 次曲線の方程式として読み替える力が問われた。複素数平面と式と曲線の組み合わせは昨年度に続く出題であり、数学 C における融合の方向が定着しつつあることを示している。

5. 最後に

最初にも述べたが、昨年のこの記事では数学 IA で「1 つの大問の図形問題で数学 I と数学 A の両方の内容を問うもの」が出るのではないかと書いたが、今回はこのような出題はなかった。しかし、「分野横断・融合」ということでは、数学

IIBC の第 7 問がそのようなことを実現している。これが他の分野に波及することも考えられる。

なお、先ほども Claude にデータを解析してもらったが、今年の問題や、得点率の傾向、問題作成部会の見解などを踏まえて Claude が出してくれた「2027 年度以降の予想」を最後に掲載しておく。問題作成部会の数学 IA の見解にあった「(AI に) 代替できない深い学びの実現」は我々も実現していく必要があると感じる。

< 2027 年度以降の予想 (by Claude) >

・分量は抑制方向、ただし「易化」ではない

会話文の精選と完答単位・配点の見直しが進めば、条件読解に費やす時間は今年よりやや軽減される可能性がある。しかしこれは易しくなることを意味しない。抽象的な条件から関数や図形を逆向きに決定させる設問や、統合的・発展的に考察させる設問は、部会が高く評価している以上、形を変えて継続する。「求める」から「決める・特定する」への反転は、今後の共通テストの基調であり続けるだろう。

・統計的な推測は、数学 IIBC で継続・数学 IA で不定期

標本サイズと検定結果の関係を扱った本年の第 5 問のように、結論の意味を考えさせる探究型の統計問題は、数学 IIBC で今後も出題される公算が大きい。一方、数学 IA での仮説検定・期待値は、本年の非出題が示すとおり固定的ではなく、隔年的・不定期的な登場になると見る。したがって受験指導上は、数学 IA でもこれらがいつ再登場してもよいよう備えておく必要がある。

・数学 C の分野融合は定着する

複素数平面と式と曲線を結ぶ出題は 2 年連続であり、ベクトル・平面上の曲線・複素数平面の選択問題群では、単一分野の処理にとどまらず、結果を図形として解釈し直す融合的な設問が続くと見る。今年の数学 IIBC の難所が計算量ではなく図形的な読み替えに集中していたことも、この方向を裏づけている。

・図形の探究型が続く

数学 IA の図形の性質は 2 年連続で空間図形が扱われ、着目すべき平面を受験者自身に定めさせる形式がとられた。教師が焦点を与えるのではなく、生徒が自ら着目点を見いだすという探究の姿勢を問う出題は、部会の意図からも継続が見込まれる。データの分析は実データ読解が軸。本年の水泳データのように、散布図・箱ひげ図・相関・外れ値の読み取りを軸にしつつ、目的に応じてデータの傾向を批判的に考察させる方向が続くと予想する。

< 追記：AI について >

私が AI に手を出したのは今年の 5 月中旬のこと。様々な話を聞いていたが、それまでは Google での検索結果に AI(Gemini) の回答が出てくるのを見る程度であった。しかし、今回の分析も含め、AI を実際に使ってみると、活用の範囲の広さに夢中になってプロンプトを打つようになっていた。数学の問題を解いてもらうことについても、多少の不備は存在するものの、高レベルのモデル (Claude Fable5 など) では正確な解答が提示されることがほとんどである。ある日、数学 III を教えている生徒に積分計算テストをしてもらおうと「数学 III の積分の計算テストで 10 題で 15 分くらいで解けるもの」と ChatGPT にプロンプトを打ったら、本当にちょうどよい 10 題を出してくれたりもした。「これは、AI を使っているといないでは、差が付くよね」と AI に聞いたら「そうだと思います」との回答が。これは ChatGPT の回答ですが『AI と協働して思考できる人』と『AI を検索エンジンの延長としてしか使えない人』という違いが、学習や仕事の成果に影響する場面は増えていくのではないかと私は考えています。とのこと。今回の分析でも、Claude に単にデータを放り込むだけでなく、「こういうのはどうだろう」「この観点で見たらどうか」などを入れて分析を進めていった結果、今まででは見落としていた部分が減り、さらに核心を突いた分析となったのではないかと考えている。そしてこの分析結果が教育現場で生かされることを期待したい。